台湾嘉義市における都市形成史　1895年～1945年

建設工学専攻　　ME11077　野村（のむら）　和真（かずまさ）
建築史研究　　指導教員　伊藤　洋子　教授

1.はじめに

1-1.研究背景

嘉義は台湾中部西側、嘉南平原にある地方都市であり台湾の桧材を運搬する阿里山鉄道の発着場所として有名な都市である。歴史は古く、オランダが台湾に進行してきた 18 世紀にはその名を確認することができる。元々、嘉義市の地域は「緒羅山」と呼ばれ、この旧称は台湾原住民が発音するこの地域の名を漢字に当てはめたものである。嘉義市は台湾の伝統的都市の形跡を色濃く残す貴重な都市であり、日本統治期の地方都市形成を知ることができるといえる。

本稿では旧嘉義城から台鉄嘉義駅までの範囲を調査対象地として研究を行う。嘉義市における先行研究では旧嘉義城内を主な範囲として扱う研究があり、本稿では嘉義市における都市形成史を広い範囲で明らかにしていくことを目的とした。

1-2.研究方法

研究方法としては、古地図と現地調査結果を基にして比較考察をすることにより、都市形成の変容と構成を明らかにすることで、嘉義の都市形成史をまとめていく。

1-3.現地調査

2012年8月31日及び2012年9月2日を調査日程とした。調査方法として、調査範囲を37街区にわけ、街区一つ一つの航空写真に路地や日本統治期に建てられた住居のプロットを行い、かつ住居の実測調査を行った。

2.嘉義市概要

2-1.位置・地形

北緯23度29分0秒、東経120度27分0秒、台湾西南部嘉南平原の北端、嘉義縣の中央に位置している。嘉義市の東側には阿里山があり、嘉義は阿里山の麓にあることから東から西にかけて緩やかな傾斜地となっている。また、北方には牛稠渓、南方には八掌渓が流れる。

2-2.嘉義史（1895年以前）

1704年（康熙43年）に諸羅山一帯を含めた地域を治める行政機関が置かれたことにより、周囲に竹を植えた城壁として設けられ、現在の都市を原型が現れた。嘉義の旧称は諸羅でありその旧称は18世紀末に「嘉義」と呼称がかわる。

その後、嘉義は幾度の城壁改修と共に北西方向に拡大していき、現在の嘉義市に残る旧城壁跡と同規模となる。また、康熙後期から乾隆中期にかけて大陸からの移民によって嘉義の人口は増加した。拡張された城内の西側には、大陸からの移民が信仰する廟が建設されていったことにより、城内西側は市街の拡張や新興市街が現れた。

図 1　國史館臺灣文獻館蔵「嘉義城内圖」（1906年）より

清代の城の拡張は、地形が大きく関係してくる。嘉義城の地域一帯は平原ではあるが、西側から東側にかけて傾斜があり、西側には平坦な土地が広がっていた。また、諸羅城外の南と西では城壁として植えられた竹柵が牛や羊によって踏みつけられ、他の二方向より開けた土地となった。そのことで、諸羅の西と東では土地の有効性に違いができた。そのことから、城壁の改修と共に行われた嘉義城の拡張は北西方向のみであった。また、この時代、台湾府（現在の台南）が島の中心であり台湾府とのつながりは各都市にとって重要なことであり、嘉義城では西門と南門が台湾府へ通じていた。西門外付近では清代末期にかけて城内からつながる市街が形成された。

3.日本統治期における嘉義市の形成

3-1.法制度

日清戦争後、割譲された台湾で内地（日本本土）とは違う風土や風習から内地と同じ法律で施行するには非常に困難であった。そのことから、台湾総督府は1896年（明治29年）に立法委任形式を案出し、台湾においての法律効力を有する律令を発布する権限を獲得した。手続としては、台湾総督府評議会の議決を取り、拓殖務大臣を経て天皇の直裁を得る必要があり、緊急の場合にはその手続を経ることなく律令を発布し、その後に勅裁を経ることも可能であった。しかし、台湾における総督府の権限は帝国議会からあまりに包括的であるとして、憲法違反とする嫌疑が生じ、期間を三年間とする立法権とされた。その後、総督府の立法権の期間は二回延長されることとなるが、1919年（大正八年）に文官として初めて台湾総督に就任した田健治朗により、台湾独自の法律ではなく内地法施行を原則とした。ただし、特殊事情に応じて法律に特例を付すことは認められたが、その特殊事情も内地法を犯さないことが前提であった。

3-2.台湾における市区改正

台湾総督府が行った市区改正とは道路と下水道という最低限必要な都市基盤を整備するものであった。台湾の都市の衛生環境は非常に劣悪なものであり、また、道路は狭く曲がり角が多く存在した。台湾を資源確保のための植民地開発していく上でも、これらの問題は早急に解決する必要があった。そして、都市には網目状の道路がひかれ、台湾が近代化するための都市基盤が造られた。

3-3.日本統治期における嘉義市都市形成

1895年（明治28年）に嘉義城は日本の占領下に置かれた城内の衛生環境はとても劣悪なものであった。

1906年（明治39年）に嘉義を中心とする大規模な地震が発生し、4、5日連続で強いゆれが続き全体の59.1%もの住戸が被害を受けた。大きな被害を受けたのは台湾伝統的住居である土角造（団結した土塊を泥を用いて積み囲んで壁体とし、丸太をその上に掛け渡し屋根を組んだ家屋造）であり、木造や竹造の被害は極めて少ないものであった。土角造は地震に弱く、今後のことを考え嘉義市の住宅は木造と決められた。

同年、嘉義市では震災復興を目的とした「嘉義市区改正計画」の決定により城内及び、旧嘉義城と台鉄嘉義駅をつなぐ道路の整備・拡張が行われた。旧城内から道路幅八間の道路（現、中山路）が整備され、新しい物流をつくりだし、また、城内は道路が網目状にひかれた。

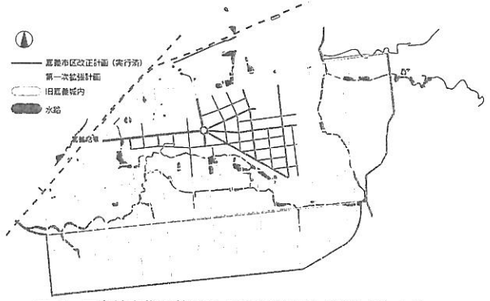

図 2　國史館臺灣文獻館蔵「嘉義市街圖」（1913年）より

1913年（大正3年）嘉義市では第一次拡張計画が行われた。この計画では嘉義站車周辺地域の開発が中心に行われ、嘉義站車の周辺に新市街を形成した。城内の道路はほとんどが完成したが、城内と嘉義站車をつないだ道路の影響により嘉義市街の発展は西側に偏りを見せた。第二拡張計画は嘉義市区改正計画の延長であり、また、林業や糖業の発展に伴い北や南側にも都市は拡張されていく。

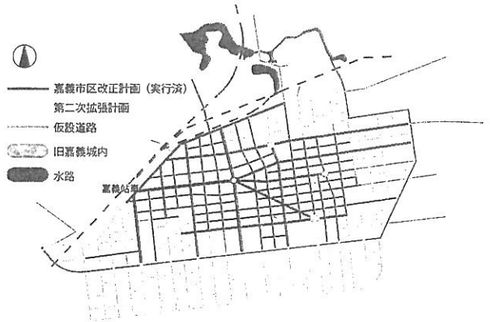

図 3　國史館臺灣文獻館蔵「嘉義市區計畫百平圖」（1932年）より

1920年以降の法制度改正により、嘉義における発展は停滞していく。嘉義はその停滞を改善するため台湾総督府に施設の設置や整備等を要求し、総督府はそれら要求を認めた。そのことにより、嘉義市の人口増大の原因となる。1920年（大正10年）から1929年（昭和4年）の間に池や沼、水路を埋め立て施設建設の用地としていった。また、1930年（昭和5年）嘉義市と改められた。

1931年（昭和6年）に開始された第二次拡張計画では嘉義站車広場の拡張、下水道の改修、嘉義と他の郡との産業道路の建設を主とした。嘉義の下水道の排水方式では南側に排水が集中し、南側では汚水が溜まりやすかった。そのため、1934年（昭和9年）以降、改修工事が行われ、下水道の状況を改善された。

4.現地調査結果

4-1.街区調査結果

調査した街区において路地を有する街区は七割弱と現存していた。路地を有する街区には日本統治期の住宅が多く現存し、路地が通る街区の内部には市区改正道路より多く存在した。中山路と中正路は1906年（明治39年）「嘉義市区改正計画」の段階から整備拡張された。旧城内と嘉義站車をつなぐ中山路と中正路は、日本統治期における新興市街であった。建物の敷地は均等に分けられ、奥行ある敷地となっている。これは、中山路と中正路に面する建物に目立つ特徴である。現在も嘉義市における商業の中心地として多くの店が軒を構えている。街区内には日本統治期における日式住宅も多く現存しているが中山路と中正路に面している部分には少ない。

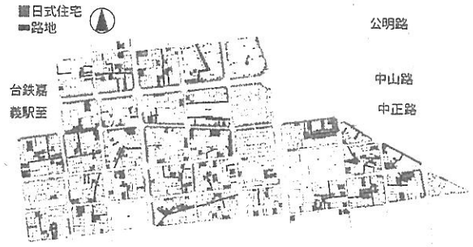

図 4　街区調査結果

4-2.日式住宅調査結果

調査となった日式住宅は、ヒアリングにより約八十年前に建設されたと伝承されていることがわかった。当初の用途は不明ではあるが、現在の所有主は以前、一階を医院として使用し、二階を住居として使用していた。（現在は空き家となっている）左右対称の平面構成や入口を後退させてできる停仔脚は内地の住宅にはみられない特徴といえる。

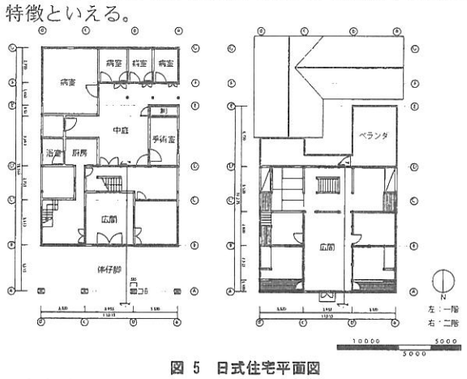

図 5　日式住宅平面図

5.まとめ

嘉義市における都市形成は清代の都市の道の軸線を変えることなく行われた。それには、嘉義市の地形が大きく関係している。嘉義市の地形は西側に平坦な土地であるが、その他の方角は西側よりも傾斜を持つ土地となっている。清代においても、土地利用は西側に偏っており、交通の発達も西側がほとんどであった。そのため、清代の道の軸線を基本とした市区改正は旧嘉義城の西側から始められた。また、西側には鉄道が開通したことも要因としてある。そのため、嘉義站車と旧城内をつなぐ中山路や中正路沿いには新しい市街ができ、嘉義市における経済や交通の中心として発展した。

嘉義市の開発及び発展には地形が大きく関わり、これは清代と日本統治期の二つの時期に共通することであった。鉄道の開通も日本統治期の開発及び発展の要因ではあるが、鉄道は平坦な場所にひかれるものであるから、必然的に旧嘉義城の西側にひかれた。これらのことから、嘉義市の都市形成に地形は大きな要因であり、また、特徴であるといえる。

6.参考文献

「日治時期　臺灣都市発展地圖集」
黄武達編著　南天書局有限公司　國史館臺灣文獻　2006
「日拠時代に於ける台湾諸都市の都市体態に関する研究」
2008年度　芝浦工業大学大学院修士論文　安原賢司
「日本統治期における台湾嘉義市城内の震災復興計画と街区構成の変遷」
2011年度　東京理科大学学部論文　伝田あゆみ
Under the maps to restoration the Chiayi city streets life history vicissitude　「圖繪復原的嘉義市街生活歴史變遷」
2008年度　國立臺南大學臺灣文化研究所碩士論文　師嘉瑀